

第64回名古屋春栄会
演目のあらまし

令和4年7月31日

名古屋春栄会事務局

目 次

清経（きよつね）	1
羽衣（はごろも）	2
天鼓（てんこ）	3
高砂（たかさご）	4
芦刈（あしかり）	5
船橋（ふなばし）	6
忠度（ただのり）	7
通小町（かよいこまち）	9
柏崎（かしわざき）	10
鍾馗（しょうき）	11
二人静（ふたりしずか）	12
誓願寺（せいがんじ）	13
竜田（たつた）	14
難波（なにわ）	15
〔能のミ二知識〕	16

このリーフレットは、第64回名古屋春栄会の演目を解説したものです。
演目の記載順は、番組の順です。
詞章については、金春流の謡本から転載しました。

清経（きよつね）

【分類】二番目物（修羅物＝公達物）

【作者】世阿弥

【主人公】シテ：平清経（面・中将）

【あらすじ】（仕舞 [キリ] の部分…下線部）

平清経の家臣、淡津三郎はひそかに一人で九州から都へ戻って来ます。清経は、平家一門と共に幼帝を奉じて都落ちし、西国へと逃れますが、敗戦につぐ敗戦に、前途を絶望して、豊前国（福岡県）柳ヶ浦で、船から身を投げて果ててしまいます。三郎は、その形見の黒髪を、清経の妻に届けるために、戻って来たのです。その話を聞いた妻は、せめて討ち死にするか病死ならともかく、自分を残して自殺するとは、あんまりだと嘆き悲しみます。そして形見の黒髪も見るに忍びず、涙ながらに床につくと、夢の中に清経の霊が現れ、妻に呼びかけます。妻は嬉しくもあるが、再び生きて姿を見せてくれなかったことを恨みます。清経は、都を落ちた平家一門が、筑紫での戦にも敗れ、願をかけた宇佐八幡の神からも見放されたいきさつ、敗戦の恐ろしさ、不安、心細さを話して聞かせ、望みを失って月の美しい夜ふけ、西海の船上で横笛を吹き、今様を謡って入水したことを物語って、妻を納得させようとしています。続いて修羅道の苦しみを見せますが、実は入水に際して十念を唱えた功德で成仏し得たと述べ、消えてゆきます。

【詞章】（仕舞 [キリ] の部分の抜粋）

さて、修羅道に落ちこちの。さて修羅道におちこちの。立つ木は敵雨は矢先。月は清剣山は鉄城。雲の旗手をついて。驕慢の剣をそろえて。じゃけんのまなこの光。愛欲とんいちつうげん道場。無明も法性も。乱るるかたき。打つは波引くほうしお。これまでなりやまことは最後の十念乱れぬみ法の舟に。頼みしままに疑いもなく。げにも心は清経が。げにも心は清経が。仏果を得しこそ有難けれ。

羽衣（はごろも）

【分 類】三番目物（鬘物＝精天仙物） *序ノ舞

【作 者】不詳

【主人公】シテ：天人（面・増女）

【あらすじ】（仕舞 [クセ] の部分…下線部）

駿河国（静岡県）三保の松原に住む白龍という漁師が今日も釣にやってきました。そして、のどかな浦の景色を眺めていると、いい匂いがしてきます。あたりを見回すと、一本の松の木の枝に美しい衣がかかっています。そこで、家宝にでもしようとして持って帰りかけると、一人の女性が現れて呼び止め、それは自分のものだから返してほしいと頼みます。その女性が天人であり、その衣が天の羽衣であることを聞かされた白龍は、そんなに珍しいものかと喜び、国の宝にしようと思返そうとしません。天人は羽衣がなくては天に帰れないと、空を仰いで嘆き悲しみます。その姿があまりに哀れなので、白龍は、羽衣を戻すかわりに、天人の舞楽を見せてほしいと頼みます。天人は仕方なく承知し、羽衣を着て月世界における天人の生活の面白さや、三保の松原の春景色をたたえた舞を舞いながら、天空へと上っていきます。

【詞章】（仕舞 [クセ] の部分の抜粋）

春霞。たなびきにけり久かたの。月の桂の花や咲く。げに花かずら。色めくは春の
しるしかや。面白や天ならで。ここも妙なり天つ風。雲の通路吹きとじよ。乙女の
姿。しばし留りて。この松原の。春の色を三保が崎。月清見瀉富士の雪。いづれや
春のあけぼの。たぐい波も松風も。のどかなる浦の有様。その上天地は。何を隔て
ん玉垣の。内外の神の御末にて。月も曇らぬ日の本や。君が代は。天の羽衣まれに
来て。なずともつきぬ巖ぞと。聞くも妙なり東歌。声そえて数々の。笙笛琴篋篋。
孤雲のほかにみちみちて。落日の紅は。蘇命路の山をうつして。緑は波に浮島が。
拂う嵐に花ふりて。げに雪をめぐらす。白雲の袖ぞ。妙なる。

天鼓（てんこ）

【分 類】四番目物（遊樂物・唐物） *楽

【作 者】不詳

【主人公】前シテ：天鼓の父・王伯（面・小尉）、後シテ：天鼓の霊（面・童子）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

昔、中国に王伯王母という夫婦がいました。妻は天から鼓が降り下り、胎内に宿る夢を見て一子を生み、その名を天鼓とつけました。その後本物の鼓が天から下り、その子供の手に入ります。それは実に美しい音を出します。その噂を伝え聞いた天子が、鼓を献上するように命じます。少年はそれを拒んで山中に逃げたが、探し出され、鼓は召し上げられ、その身は呂水に沈められてしまいます。宮中に運び込まれたその鼓は、その後、誰が打っても音を出しません。[ここまでは能では演じられません]

そこで、勅使が少年の老父のもとにつかわされ、宮中へ来て鼓を打つように命ぜられます。愛児を失った老父は、日夜悲嘆に泣いていますが、勅命を受け、自分も罰せられる覚悟で参内します。恐れかつ懐かしむ心で鼓を打つと、不思議にも妙音を発しました。この奇跡に、天子も哀れを感じ、老父に数多の宝を与えて帰させます。

<中入>

そして天鼓のために、呂水の堤で、追善の管絃講（音楽法要）を行います。すると天鼓の霊が現われ、今は恨みも忘れて手向けの舞樂を謝し、自ら供えられた鼓を打ち、樂を奏し、喜びの舞を舞って興じます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

おもしろや時もげに。おもしろや時もげに。秋風楽なれや松の風。柳葉を。払って月も涼しく。星も相逢う空なれや。烏鶺の橋のもとに。紅葉を敷き。二星の館の前に風冷やかに夜もふけて。夜半楽にも早なりぬ。人間の水は南。星は北にたんだくの。天の海面雲の波。立ちそうや呂水の堤の。月にうそむき水にたわむれ。波をうがち。袖を返すや。夜遊の舞樂も時去りて。五更の一点鐘も鳴り。鳥は八声のほのぼのと。夜も明け白む時の鼓。数は六つの巷の声に。また打ち寄りて現か夢か。またうち寄りて現か夢。幻とこそなりにけれ。

高砂（たかさご）

【分類】初番目物（脇能＝男神物） ＊神舞

【作者】世阿弥

【主人公】前シテ：老翁（面・小尉）、後シテ：住吉明神（面・邯鄲男）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

肥後国（熊本県）、阿蘇の宮の神主・友成は、都見物を思い立ち旅に出ます。途中、播州（兵庫県）高砂に立ち寄り、浦の景色を眺めていると、そこへ竹杷（熊手）と杉箒を持った老夫婦がやって来て、松の木陰を掃き清めます。友成は、有名な高砂の松はどれかと尋ね、また、高砂の松と住吉の松とは場所が離れているのに、なぜ相生の松と呼ばれるのかと、その理由を尋ねます。老人は、この松こそ高砂の松であると語り、たとえ場所を隔てていても夫婦の仲は心が通うものだ、現にこの姥は当所の者、尉は住吉の者だと言います。そして老夫婦は、さまざまな故事を引いて松のめでたさを語り、御代を寿ぎます。やがて二人は、実は相生の松の精であることを明かし、住吉でお待ちしていると告げて、小舟に乗って沖の方へ消えていきます。

<中入>

友成は、土地の者に再び相生の松のことについて聞き、先程の老夫婦の話をする、それは奇なことだから、早速自分の新造の舟に乗って住吉へ行くことを勧められます。そこで、友成たちも高砂の浦から舟で住吉へ急ぎます。住吉へ着くと、残雪が月光に映える頃、住吉明神が出現し、千秋万歳を祝って颯爽と舞います。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

げにさまざまの舞姫の。声もすむなり住の江の。松陰もうつるなる。青海波とはこれやらん。神と君との道すぐに。都の春にゆくべくは。それぞ還城楽の舞。さて万歳の。小忌衣。指すかいなには。悪魔を払い。おさむる手には。寿福をいただき。千秋楽は民をなで。万歳楽には命をのぶ。相生の松風。さっさっの声ぞ楽しむ。さっさっの声ぞ楽しむ。

芦刈（あしかり）

【分類】四番目物（男物狂物） *男舞

【作者】世阿弥（古能を改作）

【主人公】シテ：日下左衛門（直面〔ひためん＝素顔〕）

【あらすじ】（仕舞〔クセ〕の部分…下線部）

津の国の日下の里（大阪府東大阪市）の住人の左衛門は貧乏のすえ、心ならずも妻を離縁します。妻は、京の都に上って、さる高貴な人の若君の乳母となり、生活も安定したので、従者を伴って難波の浦へ下り、夫の行方を尋ねます。在所の者に聞いても、以前のところにはいないということで、途方にくれますが、しばらくの間、付近に逗留して夫を捜すことにします。一方、左衛門は落ちぶれて、芦を刈りそれを売り歩く男になっています。しかし、彼はその身の不遇を嘆くでも怨むでもなく、すべてを運命と割り切って、時に興じ物に戯れ、自分の生業に満足しています。そして、ある日妻の一行とも知らず、面白く嘯しながら芦を売り、問われるままに、昔、仁徳天皇の皇居があった御津の浜の由来を語り、笠尽しの舞をまっせ見せます。いよいよ買ってもらった芦を渡す段になって、思いがけず妻の姿を見つけ、さすがに今の身の上を恥じて、近くの小屋に身を隠します。後を追おうとする従者をとどめ、妻は自分で夫に近づき、やさしく呼びかけます。夫婦は和歌を詠み交わして、心もうちとけ、再びめでたく結ばれます。装束も改めた左衛門は従者のすすめで、和歌の徳を讃え、祝儀の舞を舞い、夫婦うち揃って京の都へ帰ってゆきます。

【詞章】（仕舞〔クセ〕の部分の抜粋）

難波津に。咲くやこの花冬ごもり。今は春べと咲くや。この花と栄えたまいける。仁徳天皇と。聞こえさせたまいは。難波の皇子のおんことまた浅香山の言の葉は。采女の。杯取りあえぬ。恨みを述べし故とかや。この二歌は今までの。歌の父母なる故に。代々にあまねき花色の。言の葉草の種とりて。われらごときの。手習う始めなるべし。しかれば目に見えぬ。鬼神をもやわらげ。武士の心慰むる。夫婦の情知ることも今身の上知られたり。津の国の。難波の春は夢なれや。芦の枯葉に風わたる。波の立ち居の隙とても。浅かるべしやわだずみの。浜の真砂は。よみ尽くし尽くすとも。この道は尽きせめや。ただもてあそべ名にし負う。難波の恨みうち忘れて。ありし契りに帰り逢う。縁こそ嬉し。かりけれ。

船橋（ふなばし）

【分類】四・五番目物（執心物）

【作者】世阿弥（古能を改作）

【主人公】シテ：里の男（直面）、後シテ：男の霊（怪土）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

熊野三山で修行した山伏たちが、上野国（群馬県）佐野の里に着くと、里の男と女が橋を渡そうとしており、山伏に勧進を求めます。そして、ここは昔男女が恋い焦がれながら川に沈んだ場所であると、万葉集の歌を引き合いに出し、二人を救うためにも橋を架けたいと言い、役行者を引き合いに出し、勧進を迫ります。山伏が万葉集の歌の意味を尋ねると、男は、昔ここに住むある男が、川をへだてた向こうに住む女に憧れて、毎夜船橋を渡って通っていたが、それを良く思わない二人の親が橋の板をとりはずしたために、男は川に落ちてしまい、そのまま亡くなり地獄で苦しんでいると話します。そして、男女は、自分達こそその二人の霊だと明かし、夕暮の鐘の響く頃、姿を消してしまいます。

<中入>

山伏たちが男女の霊を吊っていると、二人は在りし日の姿で現れ、地獄の苦しみを訴え、弔いに感謝します。男の霊はかつての所業を懺悔のために昔の有様を見せようと言い、在りし日の姿を再現して見せ、仏法の力で救われたと言って消えていきます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

よいよいに。通い馴れたる。船橋の。さえわたる夜の。月もなかばに。更けしずまりて。人もねにふし。丑三つ寒き。河風もいとわじ。逢瀬の向いの。岸に見えたる。人影はそれか。こころうれしや。たのもしや。たがいにそれぞと。見みえし中の。たがいにそれぞと。みみえしなかの。橋をへだてて。立ちくる波の。よりはの橋か。かささぎの。ゆきあいの間ぢかく。なりゆくままに。放せる板間を。踏みはずし。かっぱと落ちて。沈みけり。親し。さくれば。いもにあわぬかも。執心の鬼となって。執心の鬼となって。ともに三途の河橋の。橋ばしらに立てられて。悪龍の餌じきにかわり。ほどなく生死娑婆の妄執。邪淫の悪鬼となって。我と身を責め苦患に沈むを行者の法味功力により真如。発心の玉はしの真如発心の玉橋の浮かめる身とぞなりにける。うかめる身とぞ。なりにける。

忠度（ただのり）

【分 類】二番目物（修羅物） ＊カケリ

【作 者】世阿弥

【主人公】前シテ：老翁（面：三光尉）、後シテ：平忠度の霊（面：中将）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

藤原俊成が亡くなり、その家人の一人が出家して、旅僧となって西国行脚に出かけます。そして、須磨の浦まで来た時、薪に花を折りそえて背負ってやってくる老人に出会います。老人は、ある人の亡き跡のしるしであると一本の桜に礼拝をします。旅僧が、その老人に一夜の宿を乞うと、この花の下にまさる宿はあるまいと言い、「行き暮れて木の下陰を宿とせば、花や今宵の主ならまし」と詠んだ平忠度が、ここに埋められているのだ、忠度と俊成とは和歌の友であったから、あなたにも縁があるはずだ、と言います。僧が驚いて念仏を手向けると、老人は嬉しそうに、あなたの弔いを受けたいために来たのだ、どうかここに寝て夢の告げを待って下さい、といて姿を消します。

<中入>

その夜、花の木陰に仮寝した僧の前に、甲冑姿の忠度の亡霊が現れ、浮世に心残りが多いが、中でも自分の歌が『千載集』に取り入れられながらも、朝敵となったために「読み人しらす」とされていることが妄執の第一である、だから定家に願って作者名を明らかにしてほしいと訴えます。そして、寿永の昔、出陣に際して、俊成の家を訪れ、歌集を託して出陣し、一の谷の合戦で岡部の六弥太に討たれた有様を詳しく再現して見せます。さらに討ち果たした六弥太は、その死骸の籠につけられた短冊から忠度と知り、いたわしく思った心情を見せ、どうか回向してほしいと、花の根元に消えてゆきます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

さもいそがわし。かりし身の。さもいそがわしかりし身の。心の花か蘭菊の。狐川よりひき返し。俊成の家にゆき。歌の望みをなげきしに。望みたりぬれば。また弓箭にたずさわりて。西海の波の上。しばしと頼む須磨の浦。源氏のすみ所。平家の為はよしなすと。知らざりけるぞ。はかなき。さる程に一の谷の合戦。今はこうよと見えし時。皆皆舟にとり乗って海上にうかむ。われも舟にのらんとて。汀の方に打ち出でしに後ろを見れば。武蔵の国の住人に。岡部の六弥太と名乗って。六七騎が間追かけたり。これこそ望む所よと思ひ。駒の手綱をひっかえせば。六弥太やがてむずと組み。両馬が間にどうぞ落つ。かの六弥太をとって押さえ。腰の刀に手をかけしに。六弥太が郎等。御後より立ち廻り。上にまします忠度の。右の腕をうち落とせば。左の御手にて。六弥太とて投げのけ。今は叶わじと思し召して。そこを退き給え人人よ。西拝まんと宣いて。光明遍照。十方世界念仏衆生攝取不捨と

宣いしに。御声の下よりも。痛わしやあえなくも、六弥太たちを抜き持ち。遂に御首を打ち落す。六弥太心に思うよう。痛わしやかの人御死骸を見奉れば。その年もまだしき。長月頃の薄曇り。降りみ降らずみ定めなき。時雨ぞ通う村紅葉の。錦の直垂は。ただ世の常によもあらず。いか様これは公達の。御中にこそあるらめと御名ゆかしき所に。簾をみればふしぎやな。短尺をつけられたり。見れば旅宿の題をすえ。行暮れて。木の下陰を。宿とせば。花や今宵の。主ならまし。忠度と書かれたり。さては疑い嵐の音に。聞こえし薩摩の。守にてますぞ痛わしき。御身この花の。陰に立ち寄り給いしを。かく物語り申さんとて。日を暮らしとどめしなり。今は疑いよもあらず。花は根に帰るなり。わが跡といてたび給え。木陰を旅の宿とせば。花こそあるじ。なりけれ。

通小町（かよいこまち）

【分類】四番目物（雑能） ＊イロエ

【作者】観阿弥原作、世阿弥改作

【主人公】シテ：深草少将の怨霊（面・真角）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

八瀬の里で修行する僧のもとへ毎日木の実や薪を持って来る女がいました。今日もいつものように女が来て木の実づくしの物語などをしますが、僧に素性を問われると「小野とはいわじ薄〔すすき〕生いけり」とだけ口ずさみ、姿を消してしまします。僧は小野小町の幽霊だろうと察し、市原野に出掛け、小町の亡き跡を弔います。すると薄〔すすき〕の中から小町の亡霊が現れ、受戒を請います。すると続いて深草少将の亡霊が現れ、共に愛欲の地獄に留まろうと小町の成仏を妨げます。少将は生前小町に百夜通いを求められ、雨の夜も雪の夜も小町の指示通りに身をやつした姿で小町を慕って通い続けたが、九十九夜目に思いを果たせぬまま死んでしまったのでした。そこで僧は二人に受戒を勧め、懺悔としてかつての百夜通いの有様を再現するように説きます。少将は百夜通いの様子を狂おしく再現して見せ、やがて二人とも一念の悟りによって共に成仏します。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

暁は。暁は。数々多き。思いかな。我が為ならば。鳥もよし鳴け。鐘もただ鳴れ。夜も明けよ。ただ独り寝ならば。辛からし。かように心を。尽し尽して。かように心を尽し尽して。榻の数々。よみて見たれば。九十九夜なり。今は一夜よ嬉しやとて。待つ日になりぬ急いで行かん。姿はいかに。笠も見苦し。風折烏帽子。蓑をも投げ捨て。花摺り衣の。色襲ね。裏紫の藤袴。待つらんものを。あら急がしや。すわ早今日も。紅の狩衣の。衣紋気高く引き繕い。飲酒はいかに。月の盃なりとても。戒ならば保たんと。ただ一念の悟にて。多くの罪を滅して。小野の小町も少将も。共に仏道なりにけり。共に仏道なりにけり。

柏崎（かしわざき）

【分 類】四番目物（狂女物） ＊カケリ

【作 者】世阿弥

【主人公】前シテ：柏崎某の妻（面・曲見）、後シテ：柏崎某の妻〔狂女〕（面・曲見）

【あらすじ】（仕舞〔道行〕の部分…下線部）

越後国（新潟県）の柏崎の領主某の従者が鎌倉から帰国し、主人である柏崎の領主が鎌倉で急逝したことを領主の妻に報告します。それを聞いた領主の妻は夫の死を受け入れることなどできないと嘆き悲しみます。さらに、父の死を嘆いて出家するという息子花若からの手紙を目にし、夫と息子という愛する二人を一度に失った領主の妻の嘆きは、わが子への恨みに変わります。しかし、その一方でわが子を守り給えと神仏に祈るのでした。

<中入>

時が過ぎ、信濃国（長野県）の善光寺で、僧の姿をした花若が、住職に伴われて如来堂に向っています。阿弥陀如来へのお勤めを始めて、今日がちょうど満参日に当たるのです。そこへ一人の狂女が現れます。この女こそ、夫の成仏を願い、子の無事を願っているうちに、仏に導かれるようにこの善光寺へやって来た柏崎の領主の妻でした。如来堂に上がり、夫の成仏を祈念しようとする狂女に、住職は女人の身で如来堂に上ることは叶わぬゆえ、早々に立ち去るよう伝えます。しかし、狂女は如来堂から立ち去ろうとせずに、供物として持参した夫の形見の烏帽子と直垂を取り出して、自らの心の内を阿弥陀如来に訴え始めます。その狂女の一途な様子を見ていた花若は、自分こそ息子であると狂女の前に名乗り出ます。互いの変わり果てた姿にしばし呆然とする母と子ですが、それが現実であることを知ると、心の底から互いの無事と再会を喜び合うのでした。

【詞章】（仕舞〔道行〕の部分の抜粋）

越後の国府に着きしかば。越後の国府に着きしかば。人目も分かぬわが姿。いつまで草のいつまでと。知らぬ心は麻衣。うら遙々と行くほどに。松陰遠く寂しきは。常盤の里の夕べかや。われにたぐえて。あわれなるはこの里。子ゆえに身を焦がししは、野べの木島の里とかや。降れども積もらぬ淡雪の。浅野というはこれかとよ。桐の花咲く井の上の。山を東に見なして。西に向かえば善光寺。生身の弥陀如来。わが狂乱はさて置きぬ。死して別れし。夫を導き。おわしませ。

鐘馗（しょうき）

【分類】 五番目物（鬼神物）

【作者】 金春禅竹

【主人公】 シテ：鐘馗の霊（真角）、後シテ：鐘馗の霊（小癒見）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

中国の終南山の麓に住む者が奏聞のため都に上る途中で、怪しげなる者に後ろから呼び止められます。旅人がいかなる人かと尋ねると、自分は進士の試験に落ち自殺した鐘馗という者であるが、悪鬼を亡ぼし国土を守らんと誓いを立てているので、そのことを帝に奏上してほしいと言います。そして、後ほど真の姿を現そうと言って消え失せます。

<中入>

そこで、旅人が読経して鐘馗の亡魂を弔っていると、鐘馗の霊が現れ、宝剣を持って妖魔悪鬼を退治する有様を見せます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

鐘馗及第の。鐘馗及第のみぎんにて。われと亡ぜし悪心を。翻す一念。発起菩提心なるとかや。げに誠ある誓いとて。国土を静めわきてなお。禁裡雲井の楼閣の。ここやかしこに遍満し。あるいは玉殿。廊下の下。御階のもとまでも。御階のもとまでも。剣をひそめて忍び忍びに。求むれば案のごとく。鬼神は通力失せ。現れ出ざるをたちまちに。ずだずだに切りはなちて。目の当たりなるその勢い。ただこの剣の威光となって。天に輝き地に遍く。治まる国土となること。治まる国土となることも。げに有難き誓いかな。げに有難き。誓いかな。

二人静（ふたりしずか）

【分類】三番目物（鬘物） *序ノ舞

【作者】不明

【主人公】前シテ：里女（面・小面）、後シテ：静の霊（面・小面）

【あらすじ】（今回の連吟の部分…下線部）

吉野山勝手明神の神職は、正月七日の神事に供える若菜を摘むために、女を菜摘川へつかわします。菜摘女が、雪の消え残る野辺で若菜を摘んでいると、どこからともなく一人の女が現れて話しかけてきます。そして、吉野へ帰ったら神職の人などに頼んで、一日写経をして自分を供養してくれるよう伝言してほしいと言います。菜摘女は驚いて名を尋ねますが、女はそれには答えず、この旨を疑う人があれば、そのとき自分があなたに憑いて名を明かしましょうと言いつつ消え失せます。

<中入>

急いで立ち帰った菜摘女は、この事を神職に告げ、自分でも不思議に思っているとふと疑いの言葉をもらすと、たちまち先刻の霊が乗り移って、気色が変わります。神職が霊に名を問うと、判官殿に仕えた者と述べ、静御前であることをほのめかします。静の霊であることを知った神職は、舞を所望し、跡を弔うことを約束します。女は宝庫に収められた昔の舞衣装を取り出させ、それをつけて舞い始めると、静の亡霊も同じ衣装で現れます。そして女の影に添うごとく、義経の吉野落ちの辛苦や、頼朝に召されて舞を所望され、心ならずも舞った時の有様を物語りつつ、二人一体の如く舞い、後の回向を頼んで、静の霊は去っていきます。

【詞章】（今回の連吟の部分の抜粋）

賤やしず。賤のおだまき。繰りかえし。昔を今に。なすよしもがな。思い返せばいにしえも。思い返せばいにしえも。恋しくもなき憂き事の。今も怨みの衣川。身こそは沈め。名をば沈めぬ。武士の。物ごとに浮世の習いなればと。思いかえせば山桜。雪に吹きなす花の松風。静が跡をといたまえ。静が跡を。といたまえ。

誓願寺（せいがんじ）

【分 類】三番目物（鬘物） ＊序ノ舞

【作 者】世阿弥

【主人公】前シテ：里女（面・増女）、後シテ：和泉式部の霊（面・増女）

【あらすじ】（仕舞 [クセ] の部分…下線部）

一遍上人が熊野権現に参籠している時に、「南無阿弥陀仏決定往生六十万人」の札を
広めよという霊夢を見ます。そこで、上人は都に上り、念仏の大道場、誓願寺で御
札を配ります。すると、一人の女性が御札の言葉を見て、「六十万人より外は往生で
きないのでしょうか」と問いかけます。上人は、「これは霊夢の、六字名号一遍法、
十界依正一遍体、万行離念一遍証、人中上々妙好華の四句の上の字をとったもので
あり、南無阿弥陀仏とさえ唱えれば誰もが必ず往生できる」と説きます。すると女
性はありがたがり、「本堂の『誓願寺』の寺額に替えて、上人の手で『南無阿弥陀仏』
の六字の名号をお書きください。これはご本尊阿弥陀如来の御告です。私はあの石
塔に住む者です」と言って、近くの和泉式部のお墓に姿を消します。

<中入>

一遍上人が『南無阿弥陀仏』の名号を書いて本堂に掲げたところ、どこからともな
く良い香りがし、花が降り、快い音楽が聞こえ、瑞雲に立たれた阿弥陀如来と二十
五菩薩と共に、歌舞の菩薩となった和泉式部が現れます。そして、誓願寺が天智天
皇の勅願によって創建された縁起を語ります。続いて、阿弥陀如来が西方浄土より
誓願寺に來迎される模様などを表す莊嚴優美な舞を舞います。最後に、菩薩聖衆み
な一同に本堂の六字の額に合掌礼拝します。

【詞章】（仕舞 [クセ] の部分の抜粋）

笙歌はるかに聞こゆ孤雲の上なれや。聖衆來迎す落日の前とかや。昔在靈前の。御
名は法華一仏。今西方の弥陀如来。慈眼視衆生現われて。娑婆示現觀世音。三世利
益同一體。有難や。われらがための悲願なり。若我成仏の。光を受くる世の人の。
わが力には行きがたき。御法の御舟の水馴棹。さきでも渡るかの岸に。至り至りて
楽しみを。極むる国の道なれや。十悪万邪の。迷いの雲も空晴れ。真如の月の西方
も。ここを去ること遠からず。唯心の浄土とはこの。誓願寺を。拜むなり。

竜田（たつた）

【分類】四番目物（夜神楽物＝略初番目物） ＊神楽

【作者】金春禅竹

【主人公】前シテ：巫女（面・増女）、後シテ：竜田姫の神霊（面・増女）

【あらすじ】（仕舞〔キリ〕の部分…下線部）

日本六十余州の神社仏閣に納経を志す廻国の僧が、奈良の社寺を拝し終え、続いて河内国（大阪府）へと急いでいます。途中、竜田明神に参詣のため、竜田川を渡ろうとすると、一人の巫女が現れ、「竜田川 紅葉乱れて 流るめり 渡らば錦 中や絶えなん」という古歌をひいて止めます。僧が、それは秋のことで、今はもう薄氷が張っている頃なのにと云うと、巫女は更に「竜田川 紅葉を閉づる 薄氷 渡らばそれも 中や絶えなん」という歌もあると答え、別の道から社前に案内します。そして、霜枯れの季節にまだ紅葉しているのを不審に思う僧に、紅葉が神木であることを語ります。さらに竜田山の宮廻りをするうちに、巫女は、自分は竜田姫の神霊であると名乗って社殿の中へ姿を消してしまいます。

<中入>

その夜、僧が社前で通夜をしていると、竜田姫の神霊が現れて、明神の縁起を語り、あたりの風景を賞美したあと、神楽を奏して、虚空へと上っていきます。

【詞章】（仕舞〔キリ〕の部分の抜粋）

ひさかたの。月も落ちくる。滝まつり。波の。竜田の。神のみ前に。神のみ前に。
散るはもみじ葉。すなわち神の幣。竜田の山陰の。時雨降る音は。さっさっの鈴の
声。立つや川波は。それぞ白木綿。神風松風吹き乱れ吹き乱れ。もみじ葉散り飛ぶ
木綿附鳥の。み被も幣も。ひるがえる小忌衣。謹上再拝再拝再拝と。山河草木国土
治まりて。神はあがらせ。たまいけり。

難波（なにわ）

【分類】初番目物（協能） ＊楽

【作者】世阿弥

【主人公】前シテ：老翁（面・小尉）、後シテ：王仁（面・悪尉）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

廷臣が従者と共に熊野から京の都に帰る途中、難波に立ち寄ります。すると杉箒を持った老翁が連れの男と共に現れ、天下泰平の春を詠いながら、梅の木陰を掃き清めます。廷臣が老人たちに梅の木のいわれを尋ねると、老翁は難波津の歌、仁徳帝の慈愛、難波の都の平和と繁栄について語り、自分は仁徳帝の即位を推進した百済国の王仁であると名乗り、舞楽を舞うことを約して立ち去ります。

<中入>

難波の春の夜に木華開耶姫〔このはなさくやひめ〕と王仁が現れて名乗ります。そして木華開耶姫〔このはなさくやひめ〕が梅の花を詠じて舞を舞います。続いて王仁が難波を祝福して舞楽を舞います。舞楽のうちの古の聖賢をたたえ、治世を祝福します。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

あら面白の音楽や。あら面白の音楽や。時の調子にかたどりて。春鶯囀の楽をば。春風ともろともに。花を散らしてどうど打つ。秋風楽はいかにや。秋の風もろともに。波を響かしどうど打つ。万歳楽は。よろず打つ。青海波とは青海の。波立て打つは。採桑老。抜頭の曲は。返り打つ。入り日を招き返す手に。入り日を招き返す手に。今の太鼓は波なれば。寄りては打ち。返りては打つ。この音楽に引かれて。聖人御代にまた出で。天下を守り治むる。天下を守り治むる。万歳楽ぞめでたき。万歳楽ぞめでたき。

能のミニ知識

★能の分類

五番立て…能の催しは、一日に五番(五曲)が正式とされています。異なる雰囲気のものを実効果的に組み合わせるノウハウとして、神(神がシテ)・男(修羅に苦しむ男性がシテ)・女(美しい女性がシテ)・狂(狂女などがシテ)・鬼(鬼畜がシテ)の順に演じます。ただし、鬼がシテ(五番目物)であっても内容がめでたいため初番目に演じられる場合がある(略脇能物)など、完全に固定されているわけではありません。

○初番目物(脇能)

江戸時代の正式の演能では「翁」につづいて行われた能です。

神を主人公として、神社の縁起や神威を説き、国の繁栄を予祝し聖代を寿ぐ内容で、演劇性よりは祭祀性の強い作品です。

○二番目物(修羅能)

仏教では、戦にたずさわった者は修羅道に堕ちて苦しむといわれます。シテ(主に源平の武将の亡霊)が、旅僧の前に現われ、合戦の様子を見せ、死後の責苦を訴え、回向を願う作品です。

○三番目物(鬘[かづら]物)

シテ(『源氏物語』など王朝文芸のヒロインや歴史上の美女、植物の精など)が、ありし日の恋物語などを回想し静かに舞を舞うという構成です。

全般に演劇性よりも舞踊性・音楽性が強く、能の理想美である幽玄の風情を追求した作品が多いです。

○四番目物(雑能)

他の分類に属さない能が、ここに集められています。

男女の「物狂物」、史上の武士を主人公とした「現在物」、非業に死んだ人の「執心・怨霊物」、中国人をシテとした「唐物」など、そのスタイルは多様です。また、他の分類に比べてストーリー性・演劇性が強い作品が多いです。

○五番目物(切[きり]能)

一日の番組の最後に置かれる能です。「ピン(一番)からキリ(最後)まで」のキリです。

見た目に派手でスペクタクル性の強いものが多いため、フィナーレとして演じられます。人間以外の「鬼畜や鬼神」の能、「竜神・天狗」の能、猩々・獅子・山姥など「精霊」の類や「貴人」の早舞物などがあります。

★能の楽器

囃子方[はやしかた]…能の楽器は、笛、小鼓、大鼓、太鼓の4種類です。

この楽器を演奏する人を囃子方といいます。

笛(能管):竹製、指穴七つの横笛です。唯一のメロディ楽器です。

小鼓:左手で右肩にかついで、右手で打ちます。

大鼓:左手で左膝にのせ、右手で打ちます。

太鼓:台に据えて、二本のバチで打ちます。

★略式の演能

素謡[すうたい]

一人または数人の謡によって能一番を聞かせるもの。演者は紋付袴姿で、シテ・ツレ・ワキ・地謡などに分かれて謡う。

江戸時代に入って一般に普及した上演形態。

独吟[どくぎん]

謡の「聞かせどころ」を独演するもの。演者は紋付袴姿。

連吟[れんぎん]

謡の「聞かせどころ」を複数で披露するもの。演者は紋付袴姿。

仕舞[しまい]

能一曲のうち、クセやキリなどのシテの所作の「見せどころ」だけを舞う(通常 5 分程度)。シテは装束や面をつけず紋付袴姿で地謡(ボーカル)だけをバックにして舞う。仕舞扇を用いるが、小道具、作り物(大道具)は原則として用いない。シテ一人で演じるのが普通だが、特殊なものにシテとツレ、シテとワキ、ワキー人、ツレと子方で演じるものもある。

鑑賞芸としての仕舞は、江戸初期になって成立したとされる。

舞囃子[まいばやし]

舞事・働事(囃子の演奏に支えられた能の中の一番の「見せどころ」)を中心に、シテが地謡と囃子(器楽)をバックにして装束や面をつけずに舞うもの。平均して 10~20 分程度の長さになる。長刀や杖などの手道具は用いるが、作り物(大道具)は省略する。

舞囃子は江戸初期に少しずつ上演される形式となったが、徳川五代将軍綱吉が愛好し、自身も舞ったことから元禄期に盛んになったとされている。

袴能[はかまのう]

面・装束を用いず、紋付袴姿で能を演じるもの。

半能[はんのう]

前場の大半を省略し、見せ場である後場を主体に演ずるもの。

独調[どくちょう]、独鼓[どっこ]、一調[いっちょう]

謡の「聞かせどころ」を、謡と小鼓・大鼓・太鼓の奏者それぞれ一人ずつで競演するもの。

一管[いっかん]

笛の「聞かせどころ」を独奏するもの。

一調一管[いっちょういっかん]

打楽器のうち一種類と笛の二重奏の場合と、謡を加えて三人で競演する場合がある。

素囃子[すばやし]

舞事・働事などの部分を、囃子(楽器)によって聞かせるもの。

番囃子[ばんばやし]

謡と囃子(音楽的要素)のみで、能一番を聞かせるもの。

★舞事と働事

舞事[まいごと]…抽象的な純粹舞踊。音楽にも所作にも表意性はありません。

○序ノ舞: ゆったりとして、静かで典雅な舞です。美女の霊、女体・老体の精、貴公子の霊などが舞います。

○真ノ序ノ舞: 老体の神の荘重な舞

○中ノ舞: 基本的な舞で、テンポは中ぐらいです。主に現身の女性が舞いますが、女体の神・精仙、遊狂僧の場合もあります。

○早舞: 拍子にリズムがあり、ノリのいい舞です。テンポは中ノ舞と神舞の間ぐらいです。貴人や成仏した女性などがすがすがしく、典雅に舞います。

○神舞: 若い男体の神がテンポも早く、颯爽と舞う舞です。

○男舞: 直面の現身の男(武士が多い)が舞う舞です。喜びや祝いの気持ちを表現して、速いテンポで勇壮闊達に舞います。

○急ノ舞: テンポの速い、激しい舞です。鬼の化身やあらぶる神などが主に舞います。

○破ノ舞: 序ノ舞や中ノ舞の後に舞い添えられる短い舞です。

「舞事」の中でも、序ノ舞から急ノ舞に至る「舞ノ類」は、どれも旋律はほとんど同じです。急ノ舞に至るに従ってテンポが次第に早くなり、それに伴ってリズムが単純化する程度の違いしかありません。

これに対して次のものは、それぞれ固有の旋律を持っています。

○神楽: 「女体の神や神がかりした巫女」が幣を持って舞う舞です。
雅な感じの舞です

○楽[がく]: 舞楽のような感じの舞です。

中国の皇帝や童子などが舞う「異国風」の舞です。

○羯鼓[かっこ]: 羯鼓とは、腹につけてバチで打つ楽器のこと。

「遊芸者」がこの楽器を演奏しながら舞う様を模した舞です。

働事[はたらきごと]…「舞事」が抽象的な形式舞踊であるのに対し、「働事」は、ある程度表意的な所作をします。

○イロエ: 囃子に合わせて舞台を一巡する舞踊的な所作のことです。

○カケリ: 「修羅道の苦しみや物狂い、不安」などを表す所作のことです。

精神的な興奮状態、心の動揺や苦痛を表現します。

○祈り: 鬼女、悪霊が山伏や僧に祈り伏せられるというものです。

「祈祷と抵抗の一進一退」が表現されます。

○舞働[まいばたらき]: 龍神、鬼神、天狗、妖怪などが「威力を誇示」して猛々しく演ずる豪壮活発なる所作のことです。

働[はたらき]ともいいます。

このリーフレットの内容は、名古屋春栄会のホームページにも掲載しています。

<http://www.syuneikai.net>